



Title	大阪大学文学部国文学研究室蔵 後鳥羽院御集（翻刻）四
Author(s)	山本, 一; 佐藤, 明浩
Citation	語文. 1987, 49, p. 41-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68770
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学文学部国文学研究室蔵

後鳥羽院御集(翻刻)四

山本一・佐藤明浩

承元二年二月内宮三十首御歌会歎

春

一五五八 春かせのなひくにつけて吉野山峯の小松そ色まさり行

一五五九 しつか庵の中かきかこふ梅かえのゆく手の袖に匂ふ春かせ

一五六〇 みよし野の霞つれなき山のはをわけてもいつる春のよの月

一五六一 烏雁いやとをさかる雲かくれなきてそこくる明ほのの山」^{23オ}

一五六二 焼かりとこよの雲におもひいてよ吉野の花の明ほのゝ空

一五六三 ひらの山みねの桜はぢりぬらん花にこき行しかのうらぶね

夏

一五六四 うたゞねの夢や昔にのこるらん花たちはなの明ほのゝ空

一五六五 郭公よはのたひねの曙に山とふ声の雲に落くる

一五六六 うき世をやしのふの山の時鳥おもひかねつゝこゑきこゆらん

一五六七 新古 時鳥雲るのよそに過ぬ也はれぬおもひの五月雨の比

一五六八 きえねたゞもゆるはたるに下の思ひさりとて人もかけし哀を

一五六九 まつしけきむかひの岡のゆふすゝみ秋よりさきにかせそなれ

行

秋」^{23ウ}

一五七〇 夕露のをくか荻はらこゝろしてふきなかへしそ秋の初かせ
一五七一 わすれにしよゝのおもひの袖の露に色ふきそふる秋かせそう

き

一五七二 足引の山の道芝ふみわけてまた聞なれぬあらしをそ聞

一五七三 同 続古 おはえすよいつれのあきの夕より露をく物と袖の成けん

一五七四 同 みよしのゝ岩のかけちをならしても猶うきものは秋の夕くれ

一五七五 宿とはん方もいつくと白雲のたな引わたる山のかけはし

冬

一五七六 しきれつゝみ山色つく山おろしに涙あらそひちる木のは哉

一五七七 山里は夜まさに長き窓の前ふかき木葉を吹あらし哉

一五七八 あやしくも夜のまのかせのさえへて今朝雪しろし庭の浅茅

生」^{24オ}

一五七九 冬くれは身にしむかせに夢さめてひとりぬるよは床やさひし

一五八〇 かさゝきのはねに霜をきさむき夜の有明の月は影そ残れる

一五八一 峯の雪みきはの氷あともなしとはれぬ冬のうちの川風

雜

一五八二 新古 なかめはや神路の山に雲消て夕の空をいてん月かけ

一五八三 けふまでは心のうちになげく世をいかでしる夜の月そあやし

一五八四 よそにてはうらむましともみえしよを袖しほれつゝなげきこ
し哉

一五八五 世中を誠にいとふ人やあるとこの夕くれの雲にとはゝや

一五八六 大空にちきる思ひのとしも経ぬ月日もうけよ行末の空

一五八七 神路山あふく心のふかきをもいはておもへは色にみうら
ん」^{24ウ}

(一行分空白)

同外宮三十首御会

春

一五八八 緒拾 白妙の袖にそまかふ都人わかなつむ野の春のあは雪

一五八九 百千鳥なげとも雪はふるさとの吉野の山の明ほのゝ空

一五九〇 にほの海やみきはの氷こきわけて霞にまかふ春の舟人

一五九一 大空はそこともみえす霞つゝかたへはしらぬ晨明の月

一五九二 なかめやるとを山松の木のまより霞にみえて帰る雁かね

一五九三 吉野山たかねの雲ははれぬらん故郷さえぬ雪つもある比
夏」^{25オ}

一五四 新古 にしへをこふる夕の軒はなる立花すくるかせそかなしき

一五九五 山里はみねのあま雲と絶して夕涼しきまきのした露

一五六 五月闇はれせぬみねの天雲になさはや袖のはすまなき比

一五九七 秋ちかくみたるゝ沢のほたるかもいなつますくる露の草村

一五九八 六月や一むらする夕たちにしはしあしき森の下露

一五九九 霞はらひ夏野にそよく小男鹿のなかぬ計の夕暮の空

秋

一六〇〇 新古 秋の露いかにをきける名残とて今朝色ふかし庭の村はき

一六〇一 新古 朝露の岡のかや原山かせにみたれてものは秋そかなしき

一六〇二 かせ吹は玉とみえつゝ朝露に荻のうは葉そしつ心なき」^{25ウ}

一六〇三 未たはむ庭の小はきの朝しめり物おもふかりや鳴て過つる

一六〇四 たれこよひひなのなからちをこきはなれやまとしまねの月をみるらん

一六〇五 袖にふく夕のかせのふかきいろをわすれてすきんみ山路の秋

冬

一六〇六 いこまやま雲のいにしへしらねともばれぬ時雨に思ひ侘つゝ

一六〇七 あしろもるうちの里人うしと世をしらすながらや袖ぬらすらすらん

一六〇八 山里のかりたの末のあさほらけしもうちらひたつそ鳴なる

一六〇九 新冬の夜のこほれる雪をふくかせに月さへさむく成まさる也

一六一〇 新かさしむる袖もや今朝は冰るらん三輪の桧原の雪の曙

一六一一 花をまつ吉野の松の雪のいろにかねてそ春の面影はたつ」^{26オ}

一六一二 かくれなくてらせはうれし神風やあふく心のふかきおくをも

一六一三 故郷になれし夕へをおもひ出で山吹をくるあきの松かせ

一六一四 新波にしく袖に跡ふめはまちとり明なは月の影もとまらし

一六一五 なかむればそこはかとなく袖ぬれぬむなしき空の四方の嵐に

一六一六 新山里のよるのあらしに夢さめておもふ心を人はしらなん

一六一七 新古 神かせやとまみてくらになひくしてかけてあふくといふもかしこし

(一行分空白)

承元々年十一月最勝四天王院御障子

春日野」^{26ウ}

一六一八 わかなつむ春日の原の雪まよりそれかとにはへ野辺の梅かえ

一六二九 からちをたえ夢路もたえぬ冲つかせ吹あけの浪の音のあらさに
吹上浜

吉野山

一六一九 新古 よしのゝたかねの桜ちりにけりあらしも白き春の明ほの

水無瀬川山歟

三輪山

一六一〇 三輪の山杉のこかくれゆく月にすゝしく名のる郭公哉

竜田山

一六一一 木の葉ちる秋も立田の山おろしよなきてもうらめさをしかの

泊瀬山

一六一三 はつせ山よのうきものはすみぬへしだの窓ふく雪の下風

難波浦」^{27オ}

一六一三 難波江やあしの葉しろくあくるよの震のおきにかりもなく也

住吉浜

一六一四 住吉のうらごく船のたえ／＼に震すとあとはみえしを

芦屋里

一六一五 ほたる飛あしやのうらにあまのたく／＼五月の空

布引瀬

一六一六 布曳のたきのしら糸うちはへてたれ山かせにかけてほすらん

生田社

一六一七 大方の秋の色たにかなしきにいくたのもりに露そつろふ

若浦」^{27ウ}

一六一八 わかのうらのあしま飛わけゆくたつの声聞かたに月そすみけ

る

海橋立

一六三〇 やとかさん人もかたのゝさゝのはにみ山もさやにあられふる

交野

一六三一 すまのあまのしほたれ衣うちはへてまではなどみぬ波の月影

須磨浦

一六三二 すまのあまのしほたれ衣うちはへてまではなどみぬ波の月影

明石浦」^{28オ}

一六三三 袖ぬらしく夜あかしのうらかせにおもふかたより月も出に

けり

鈴麻市

一六三四 はりまなるしかまの市にたつ民よ世にたつとでも物やおもは

ぬ

松浦山

一六三五 まつらかた浪にちかつく冬のよの月なへたてそ八重の塩かせ

因幡山

一六三六 天の戸やあけはいなはの峯にしもまつ夜なふけそ秋のよの月

高砂

一六三七 高砂や尾上の秋の長夜もあけぬひかりと鹿を鳴なる

野中清水」^{28ウ}

一六三八 いにしへの野中のしみつたつねはさゝわくる袖に露そこほ

るゝ

一六三九 久かたのあまの橋たて霞つゝ雲ゐをわたるかりそ鳴なる

宇治川

一六四〇 新古 橋姫のかたしき衣さむしろに待夜むなしき宇治の明ほの

大井川

一六四一 大井河浪のかよひち立かへり跡あるかせに木のはぢりつも

鳥羽

一六四二 続後撰 雲る飛かりのはせさに月さえて鳥羽たの里に衣うつ也

伏見里」^{29オ}

一六四三 をしねほす伏見のくろにゐるかりの遠さかりぬる明ほのゝ声

泉河

一六四四 泉川かは波しろくふくかせに夕涼しきかせ山のまつ

小塙山

一六四五 をしほ山こ松か原の明ほのに峯をへたてゝ立霞哉

金坂山

一六四六 あふ坂やせきの杉むらかすむめりゆくもかへるも春の道とて

志賀浦

一六四七 しかのあまの袖ふくあらしうらふけぬかへれやみきは水もそ

する

錦鹿山」^{29ウ}

一六四八 新古 すゝか河ふかき木の葉に日数へて山田の原の時雨をそ聞

二見浦

一六四九 二一見かた月をもみかけいせの海のきよき渚の春の名残に

大淀浦

一六五〇 おほよとのうらかせかすむ曙に雲るをかりの音つれて行

鳴海浦

一六五一 よる波も哀なるみの恨さへかさねてそてにさゆる比かな

浜名橋

一六五二 緒とてねになきかへるこしの雁浜名の橋の秋霧の空

宇津山」^{30オ}

一六五三 曰くるればあふ人もなしうつの山うつゝもつらし夢もみえぬ

にらん

一六五四 続古 あちきななくさめかねつさらしなやかゝらぬ山も月はすむ

佐良之那里

一六五五 空イ きよみかた月に出ぬる友ふねのこき行波もあくる程なき

清見閑

一六五六 ふしの山おなし雪けの雲間よりすそ野を分て夕立そする

富士山

一六五七 武蔵野 るすい むさしのやくればいつくにやとからん霞もみちも未をしらね

武蔵野

一六五八 白川閑」^{30ウ} 雪にしく袖に夢路もたえぬへしまた白河の閑のあらしに

白川閑

一六五九 安達原 るすい かせはやきあふくま川のさ夜千鳥涙なそへそ袖の水に

阿武隈川

一六六〇 宮城野 人とはぬあたちのまゆみたかひけばすゑさへよるの錦成らん

宮城野

一六六一 安積沼 も やあかつきさむく吹かせに鳴音によはき葦かな

〔六六二〕さゝわけしあさかのぬまの花かつみかつみる夢のあくる程な

き
さ歎

塩竈浦」^{31オ}

〔六六三〕しほかまや春のもしほのうき枕おほろ月夜に浦かせそふく

(一行分空白)

建暦二年十二月廿首御会五人百首

春

〔六六四〕みよしのゝ宮のうくひす春かけてなげとも雪は故郷の空

〔六六五〕いにしへの人さへつらし扇かりなと明ほのとちきりをきけん

〔六六六〕あさみとりのはらの霞ほのゝと遠方人のそてそきえゆく

〔六六七〕あふみなるしかの花そのさと荒て驚ひとり春を忘ぬ

〔六六八〕なれゝて雲るの花をみし春の木のまもりこし月を忘ぬ

秋」^{31ウ}

〔六六九〕旅人の袖うちはらふあきかせにしほれてしかの声そきこゆる

〔六七〇〕こそよりも秋のね覚そなれにけるつもれる年の駿なるらん

〔六七一〕なみたかもあやしく秋の疊かなうらむるから月やみるらん

〔六七二〕中ゝにおもひいてそ袖はぬるゝなれし雲るの秋のよの月

〔六七三〕年ふれは秋こそいたくなしけれ露にかはれる色はみね共」^{えねどイ}

〔六七四〕白妙の袖にいくよかなれぬらん過にしかたの秋のよの月

〔六七五〕浜かせにいまや衣をうつらなく真野の人江の秋の夕くれ

〔六七六〕長月や影ほのかなる有明に衣うつ也をかのへのまと

〔六七七〕風しぐれ行庭の木の葉の色よりもふかきは秋の思也けり

〔六七八〕窓ふかき秋の木のはを吹たてゝ又時雨ゆく山おろしのかせ」

^{32オ}

勝 関路月

(一行分空白)

勝 関路月

述懷

〔六七九〕人心うらみわひぬる袖のうへを哀とやおもふ山のはの月

〔六八〇〕いかにせん三十あまりの初霜をうちはらふ程に成にける哉

〔六八一〕人もおし人もうらめしあちきなく世をおもふ故に物思ふ身は

〔六八二〕うき世いとふおもひはとしそつもりぬるふしのけふりの夕暮

の空

〔六八三〕かくしつゝそむかん世までわするなよあまるてるかけの有明の

月

(一行分空白)

正治弐年七月北面御歌合

松製多年

〔六八四〕長世の友とやちきる春日野のまた二葉なるまつの緑を」^{32ウ}

〔六八五〕^{統古}水辺月

〔六八六〕見わたせはけふ白露のうはそめに色つきにける衣手のもり

(一行分空白)

初見紅葉

〔六八七〕^勝見よみかた閨もる波に夢さめて都にすみし月をみる哉

同七月十八日御歌合

閨路月

〔六八七〕^勝古郷虫

〔六八八〕あれにけるたかつの宮をきてみればまかきの虫やあるしなる

らん」^{33オ}

勝 関田稻花

勝 関田稻花

〔六八九〕山さとのかとたのいなはかせこえて一色ならぬ浪そたちける

同八月一日新宮歌合

杜頭祝

一六九〇 神まつるゆふしてかくる樹葉のさかへやまさん宮の玉かき

池上月

一六九一 ひろ沢の池にやとれる月影や昔をうつす鏡なるらん

野辺虫

一六九二 宮木のゝこはきか枝に露ふれて虫のねむすふ秋の夕風」^{33ウ}

(一行分空白)

同九月御歌合

神祇

一六九三 日影にも昔わすれす神かせや御裳灌川のさゝ浪の声

若草

一六九四 新規 春きてもつもりし雪は消やられてむら／＼あをしのへの若草

落花

一六九五 御芳野の春の嵐やわたるらん道もさりあへす花の白雪

菖蒲

一六九六 ゆふ風は花橋にかほりきて軒はの菖蒲露さたまらす」^{34オ}

時鳥

一六九七 郭公いつちいく田のもりならん声の名残を雲に残して

浦月

一六九八 秋の月浪路もとをくかけされて心さへにもすまの浦風

山嵐

一六九九 うすもみちなを色まされ三室山あらしにつたふ秋の時雨に

曉雪

一七〇〇 なかむれはくもうもやらす風さえて雪まの空に在明の月

水鳥

一七〇一 池さゆるみきはのつらゝさ夜更てうきねのをしも遠さかるらん」^{34ウ}

庭松

一七〇二 年は今あけぬとみれば我宿の縁の松に春かせそふく

(一行分空白)

同九月尽日御歌合当座

一七〇三 千とせまでおもかはりすな秋の月老せぬ門に影をとゝめて

忠良勝 薄見紅葉

一七〇四 定家持 暮にけり秋の日数もあらしやま紅葉を分て入逢のかね

忠良勝 晚更聞鹿

一七〇五 謹岐持 しのゝめや吹さたまらぬ秋かけに尾上のしかの声まよふ也」^{35オ}

同十月一日歌合当座
(一行分空白)

初冬嵐

一七〇六 前座主持 山河や岩まの水のいはねともあらしにしるし冬のはつそら

暮漁舟

一七〇七 保季勝 あはれなりふたみの浦のくれかたにはるかに遠き蟹の釣舟

枯野朝

一七〇八 定家持 おもふよりうらかれにけりなら柴やかりはのをのゝ明ほのゝそら

(一行分空白)

同日歌合当座
35ウ

社頭霜

一七〇九 雅経勝 千早振かた岡山は霜さえて玉かきしろくゆふかけてけり

東路月

一七一〇 定家持 すきゝてもしはしやすらへ秋の空清見か闕の月をなかもて

(一行分空白)

同十一月十一日新宮歌合当座

社頭夕風

一七一 具親持 ちはやふるあけの玉かき神さひて榎葉ことになひく夕風

海辺霞

一七二 前座主勝 海辺霞 心なき人もあらしや難波かた霞に曇るはるの浪路に」^{36オ}

古寺公

一七三 家隆負 名にしおはしはしやすらへ時鳥立はなてらのなつの夕くれ

杜間月

一七四 疾蓮持 秋かせはうはにさむしかしさきのもりのわたりに有明の月

山時雨

一七五 定家新統 立山木するのもみち秋くれてつれなき松になを時雨也

(一行分空白)

同十一月七日新宮歌合当座

紅葉残相

一七六 つれなくもあらしに残るこそゑ誠下葉の色のゆゑなきまで」^{36ウ}

寒夜埋火

一七七 音さゆるよはのあらしも埋火のあたりは冬もなき心地して

海浜重夜

一七八 霜さゆる月をなかもてかやむしろしきつうらにあまた旅ね

ぬ

(一行分空白)

同十一月八日影供歌合

暮雪山

一七一九 冬籠り春にしられぬはななれや吉野の奥の雪の夕暮

古寺月

一七二〇 はつせ山あらしにかねの音さえて月よりしらむ有明の空」^{37オ}

朝遠望

一七二一 新後拾 こまなめてうちいてのはまをみわたせは朝日にさはくしか

うらなみ

(一行分空白)

同十一月廿九日御幸住吉社三首御熊野詣

社頭祝

一七二二 はる／＼とおもふもとをし住吉やかねての松の千代の行末

海辺雪

一七二三 磯とく浪ふきたつる塙かせは雪にそつらき住吉の浦

羈中月

一七二四 新後 かねの音も聞えぬたひの山路には明行そらを月にしる誠」^{37ウ}

(一行分空白)

同十二月歌合

曉尋千鳥

一七二五 さ夜千とりゆゑをとへはすまの浦闕もりさます曉のこゑ

山家如春

一七二六 花やいそく日数やとしを惜むらん梢春たつふゆの山さと

海辺歲暮

一七二七 冬の磯に春は来にけり年なみをたつとやいはんかへるとやい

はん

(一行分空白)

正治三
建元年正月十八日影供御歌合」^{38オ}

遠島朝露

一七二八 春霞たてるやいつこ朝日かけさし行ふねをまつかうら島

隣家夜梅

一七二九 梅かゝのかすめる月に匂ふかなよそのかきねに春風そふく

山家残雪

一七三〇 まれにたに人もとひこぬ松の庵の軒はに残る春の淡雪

(一行分空白)

同三月十八日影供御歌合

梅香留袖

一七三一 梅かゝをなかめし袖にとめをきてむなしき枝に風そ残れる」^{38ウ}

翠柳誰家

一七三二 ぬししらぬそともの柳これそこのなひくにつけて春過るもの

水辺躊躇

一七三三 山川の昔のいはねの岩つゝし春にもあへぬはなの色哉

古郷山吹

一七三四 故郷の春やむかしの春の月われもとの身とさける山吹

雨中藤花

一七三五 たそれたつ／＼しざに藤のはなおりまよふ袖に春雨の空

山家暮春

一七三六 新統 くれぬともかすみはのこれ柴の戸のしはしも春の忘^唐て」^{39オ}

(一行分空白)
同三月尽新宮撰歌合

霞満遠樹

一七三七 うらの松色やまさると春みれば霞そたてるしかのから崎

驕中見花

一七三八 かせ吹は花は波とそこえまかふわけこしたひも末の松山

雨後郭公

(一行分空白)

松下納涼

一七三九 玉 柴の戸やさしもさひしきみ山への月吹風にさをしかのこゑ

山家秋月

湖上曉霧

一七四〇 新統 志賀のうらやにはてる冲^ヒは霧籠て秋もおはろの有明の月

嵐吹寒草

一七四一 草のはら露のやとりを吹からにあらしにかはる道芝の霜

雪似白雲

一七四二 風 雪やこれはらふ高まの山かせにつれなき雲の峯に残れる

寄神祇祝

一七四三 神^{風イ}かきや八重の楓葉かさねてもみもすそ河の末そはるけき」^{40オ}

遇不逢怨

(一行分空白)

同四月廿六日御会鳥羽殿初度

池上松風

一七四四 松かせに打出る波の音はしてこほらぬ池の月を残れる

(一行分空白)

同四月晦日影供歌合

曉山郭公

一七四五 時鳥 こゑははつかの山のはの有明の月にしはしゃすらへ

海辺夏月」^{40ウ}

一七四六 明石かたねぬにあけぬと詠れば浦よりつたふ空の月影

恋恋

一七四七 一すちに色そ出しとおもふには忍ふ心にかつものそなき

(一行分空白)

同日当座御会

竹風夜涼

一七四八 夏も猶かはらぬ月をしるへにて秋かせかよふ庭のくれ竹

山家五月雨

一七四九 はれゆかん程をも今は松のかとさしもつれなき五月雨の雲

(一行分空白)」^{41オ}

同五月日城南寺歌合

社頭祝言

一七五〇 つたへくる秋の山辺のしめの内にいのるかひあるあめの下哉

雨中時鳥

一七五一 雲のほるをのか五月のむら雨に声をあらそふ郭公哉

野亭水涼

一七五二 セくし水ふかき夏のゝ草の庵にもりきて月の影そとめける

(一行分空白)

同七月廿七日当座御会和歌所

暮山遠雁」^{41ウ}

一七五三 はつかりのとこよの秋をすみすてゝ山路はるかに夕くれの声

(一行分空白)

同八月三日影供御歌合和歌所初度

初秋曉露

一七五四 昨日までかゝる露やは袖にをく秋来にけりなあかつきの風

閥路秋風

一七五五 夏たにも月は秋なるきよみかた浪ふく風のこのころの空

旅月聞鹿

一七五六 夜をかさね月に朝たつたひころもきつゝなれゆくさをしかの

こゑ

古郷虫」^{42オ}

一七五七 此上句五音官御歌内如何 とふ鳥のあすかの宮の蚕月やむかしの秋に鳴なり

初恋

一七五八 ならはすよ秋なればとてをくか露かたしく袖のうちしめるま

て

久恋

一七五九 今こんといひしはかりを頼にていく長月をすくし来ぬらん

(一行分空白)

同月十五夜撰歌合

月多秋友

一七六〇 ゆく末の千とせのあきはいく廻りなれても夜はの月を詠ん

月前松風」^{42ウ}

一七六一 庭の松の木の間もりくる月影に心つくしの秋かせそ吹

月前擣衣

一七六一 あさちふの月吹かせに秋たけて故郷人はころもうつ也

海辺秋月

(一行分空白)

湖上月

一七六三 から嶠やにほの水うみの水の面にてる月浪を秋風そ吹

深山曉

一七六四 新続すみなれてたれ我やとゝなかむらん吉野ゝ奥に有明の月

野月露冷」^{43オ}

一七六五 月すめは露を霜かと吉城のゝ小萩が原はなを秋の風

田家見月

一七六六 新続やどちかき山田の庵のいなむろし誰しきなれて月をみるらん

河水似水

(一行分空白)

同夜当座御会 和歌九品

月前雁

一七六七 かりのくる峯の秋きり空はれて羽しろたへにすめる月影

月前旅」^{43ウ}

一七六八 旅の空秋のなかはをかそふれはこたへかほにも月そさやけき

月前恋

一七六九 たえすとふ月いくたひか詠してこぬ夜数多となけまほらん

(一行分空白)

同十二月二日影供歌合 隆名

寒夜冬月

一七七〇 通貢勝ふかき夜の霜をちさとに詠れば月に残れるむさしのゝ秋

山家暮嵐

一七七一 桃山勝庭の松にあらし吹こぬ夕たに深山のおくはさそなわひしき
「初恋」^{44オ}

一七七二 大臣勝の方の露なきころのそてのうへにあやしく月のぬるゝかほな

る

同十二月廿八日石清水社歌合

社頭松

一七七三 新続忠良勝八幡山あとなれそめし注連の内になを万代と松かせそ吹

月前雪

一七七四 忠良勝山かせの木のまの雪を吹からに心つくしのふゆのよの月

月宿風

一七七五 忠良勝草枕むすはぬ夢は夜比へてたゞ山かせの松にふく声

月宿風

(一行分空白)

同二年正月十三日御会 和歌所」^{44ウ}

初春松

一七七六 萬代のはしめの春としらせけり今朝初風の松にふく声

春山月

一七七七 露たち木のめも春の山のはを光のとかにいつる夜の月

野辺露

一七七八 梅かゝは露の袖につゝめともかやはかくるゝ野へのゆふかせ

(一行分空白)

同二月十日影供御歌合

海辺露

一七七九 通貢勝煙もとよりかすす塩籠のうらなれにける春の空かな」^{45オ}

関路雪

一七八〇 新古忠良勝鶯のなげともいた降雪に杉の葉白き逢坂の山

忍恋

「七八一 波にぬるゝいせをのあまのすてころも忍めたにもしほれわふ
也」

(一行分空白)

同三月廿二日三体和歌高体春 瘦体夏 冬

艶体恋 旅

春

「七八一 雁かへるとこよの花もいかなれや月はいつくもおなし春の夜
夏」^{45ウ}

「七八三 なつの夜の夢路すゝしき秋の風さむる枕にかほる立花

秋

「七八四 しほれこし袂ほすまも長月の有明の月に秋風そふく

冬

「七八五 おもひつゝあけ行夜はの冬の月やとるかせはき袖の氷に
恋」^{46オ}

「七八六 新十 いかにせん猶こりすまのうら風にくゆる煙のむすぼゝれつゝ
旅」^{46オ}

同三月同日当座御会

暮春

「七八八 ことしさへしかのやよひの花盛とはれてくれぬ春の古郷

(一行分空白)

同五月影供御歌合

曉聞時鳥

「七八九 今こんとだのめやをきし時鳥月そ待出るあり明の声
松風暮涼」

(遇不逢恋)^{46ウ}

「七八一 わすらるゝ身をしたる袖の村雨につれなく山の月は出。けり

(一行分空白)

同六月水無瀬釣殿御歌合

河上夏月

「七八一 筋士のうきね秋なる夏の月清瀧川にかせなかるなり
海辺見蟹」

「七八三 つの国があしやのさことにとふ蟹たかすむかたのあまのいさり

火

山家松風

「七八四 柴の戸をあさあけの夏の衣手に秋をともなふ松の一声
初恋」^{47オ}

「七八五 大方の夕へはさそのなかめより色つきそむる袖の一しほ
恋」^{47オ}

「七八六 新古 なげきあまりものやおもふとわかとへはまつしる袖のぬれて
こたふる」^{47オ}

久恋

「七八七 新古 おもひつゝへにける年のかひやなきだゝあらましの夕暮の空
(一行分空白)

同八月十五日夜

月前虫

「七八八 故郷のよもぎか月にむすぶ露さひしとかこつきりへす哉

月前鹿 47ウ

一七九九 いつとても月に袂はぬれこしをわきてこよひの小男鹿の声

月前風

一八〇〇 なかはだけは今夜の月を吹かへせさそなむかしの秋の山風

(一行分空白)

同八月廿日影供歌合

江月聞雁

一八〇一 秋をへて月そすみの江の松かせに雁かねさむし霜になる空

夜風似雨

一八〇二 松かせはみやまの月に廻なりね覚の秋の袖に時雨て

依恋滿恋」^{48オ}

一八〇三 せきかへす涙の川にうきねしてみる夜の夢のきたかにもあら

(一行分空白)

同九月廿九日恋十五首撰歌合

春恋

一八〇四 月残るやよひの山のかすむ夜をよゝしとつけよまたすしもあ

らす

夏恋

一八〇五 さてともいかにいはかきぬまの菖蒲草あやめとしらぬ袖の玉水

秋恋

一八〇六 よしやさはたのめぬやとの庭におふるまつとなつけそ秋の夕

かせ

冬恋」^{48ウ}

一八〇七 うつり行まかきの菊もあり／＼はなれこし比の秋をこふらし

曉恋

一八〇八 白露のおきて侘しき別をもあふにそかこつ有明の月

暮恋

一八〇九 ^{新統古}いかにせんこぬ夜あまたの袖の露に月をのみ待夕くれの空

囁中恋

一八一〇 君もし詠やすらんたひ衣あきたつ月を空にまかへて

山家恋

一八一一 身をしれは思ひもよらて杉の庵に猶さりともと松風そ吹

旅泊恋」^{49オ}

一八一二 おもふ人をうきねの夢にみなと川さむる袂にのこる面かけ

閨路恋

一八一三 恋をのみすまの閨やのいたひさしさして袖共波はわかしを

古郷恋

一八一四 ^{新古}里はあれぬ尾上の宮のをのつからまちこしよひの昔也けり

海辺恋

一八一五 いかにせん思ひありその忘員かひもなきさに波よするそて

河辺恋

一八一六 わか為とさてや山河瀬になひく玉もかりそめにかはく世もな

し

寄雨恋」^{49ウ}

一八一七 おもふ事そなたの雲となけれ共いこまの山の雨の夕くれ

寄風恋

一八一八 わくらはにとひこし比におもなれてさそあらましの庭の松風

(一行分空白)

同九月十三日夜御会当座

月前秋風

一八一九 夜半の月いつると山の峯におふる松をもはらへ秋ふかき風

水路秋月

一八二〇 にはの海やひとりそ出る秋のよの月を友とはしかの舟人

暁月鹿声」^{50オ}

一八二一 さをしかのなくねにあらぬ露そをく空行月は峯近き程

(一 行分空白)

同夜当座御会

折句 十三夜

一八二二 新統 しがの浪や浦はの月のさゆるよに昔こぶらし山の秋風

隱題 水無瀬川

一八二三 浪をみなせかはそ月のしはしすむ清瀬川のはやき流は

(一 行分空白)

同三年正月十五日御会高陽院殿

松有春色」^{50ウ}

一八二四 庭の松をのかみとりもたよりあれは今かいく世の春をむかへ

ん

(一 行分空白)

同六月十六日影供御歌合

草野秋近

一八二五 のへの庵の軒はの荻にむすひをく露をかことに夏更にけり

水路夏月

(一 行分空白)

雨後聞蟬

一八二七 せみの羽にもとをく露に雨過てぬるゝかほなる夕暮の声

(一 行分空白)」^{51オ}

同六月十六日影供の次夏月二首

一八二八 秋の月かけをや夏にかさゝきの雲のかけはし程はなけれと

一八二九 ほともなく出でいなはの峯におふるまつとしつれは有明の月

(一 行分空白)

同七月五日八幡宮撰歌合

初秋風

一八三〇 わきも子か袖吹かへす秋かせのまたうらなれぬ涙とふらん

野径月

一八三一 さひしさは秋のさかのゝへのへの露月に跡とふ千代の古道

故郷霧 海辺雁 署中春「上三首御製」^{51ウ}不被入歟

山家松

一八三二 都人とほぬ程をも思ひしれみしよりのちの庭の松風

(一 行分空白)

同八月十五夜 和歌所当座五首

月アキノツ。此五字涉五首置初二字

一八三三 あふみのやなから山の秋風に雲こそなけれからさきの月

一八三四 北へさりし雁も今夜の月ゆへや秋は都と契をきけん

一八三五 のとかならんまでとや人のちきりけんあれたらる庭の秋のよの月

月

一八三六 津の国の難波わたりは月の秋忘ねいまは春の明ほの

一八三七 きてとほん人のあはれと思ふまですめかし秋の山里の月」^{52オ}

(一 行分空白)

同十一月釋阿九十九賀御会

一八三八 新半 もとせにちかつくつけのよの跡にこえてもみゆる者の比

哉

(一) 行分空白)

同時屏風御歌

電

一八三九 霧しく春の夕くれなかむれは山さしのほる廳なる月

若草

一八四〇 下もゆるかすかの野への草のうへにつれなしとても雪の村消

花」^{52ウ}

一八四一 桜さくとを山鳥のしたり尾のなかくし日もあかぬ色哉

郭公

一八四二 ほのかにもいまや聞らん時鳥いや遠さかる末のさと人

五月雨

一八四三 水まさるみつのわたりのさみたれにつなてほとふるのはり舟

哉

納涼

一八四四 清水せくかた山きしお松かけこゝをしめてや庵むすはん

秋野

一八四五 旅ねするのはら秋かせ身にしめて面影さらぬ故郷の月

月」^{53オ}

一八四六 秋のしもしろきをみればかさゝきのわたせる橋に月のさえけ

る

紅葉

一八四七 山のせみなきて秋こそふけにけり木々の梢の色まさりゆく

千鳥

一八四八 たひねするあまのとまやのとまをあらみ寒風に千鳥さへなく

(アシ)

水月。

野露

一八四九 宮城のゝ草葉に露やおもるらん木の下はらふ秋の初かせ

雪

一八四五 山ふかきしのやの雪のあさければ都はなをやみそれふるらん

一八五〇 大井川水水(行間大ノ余白ニ注記「一行ニ立ヘシ」)をのくいかたしのあとよりこそは舟のかよひち

(一) 行分空白)

同月日六首和歌所」^{53ウ}

故郷春曙

一八五一 三吉野や花はかはらす雪とのみ古郷匂ふあけほのゝ空

羈中夏螢

一八五二 玉もしき一夜ふしみんあしのやのなたのしほちにほたる飛也

野径秋風

一八五三 いにしへの千代の古道としへても猶あとありやさかの山かせ

山家冬雪

一八五四 いつまでか跡をも雪におしみこし春にまかする柴の庵哉

海辺月明

一八五五 清みかたふしの煙やきえぬらん月影みかくみほのうら浪」^{54オ}

寄暮雑歌

一八五六 なかものみしつのをたまきくりかへし昔を今の夕くれの山

(一) 行分空白)

元久元年七月十六日御金宇治御幸

一八五七 うちの山雲ふきはらふ秋かせにみやこのたつみ月もすみけり

かせ

一八五八 むかしよりたえぬなかれにすむ月をみかきてわたるうちの川

夜恋」^{54ウ}

「八六〇 足引の山風吹て寒き夜のなきをひとり恋つゝそふる

秋旅

「八六一 都いてしまだ夏衣うすき程としはし吹そふふしの秋風

(一)行分空白)

同八月十五夜御会五辻殿初度

松間月

「八六二 月のすむひらのゝ松に吹かせのちかきを宿のかひにする哉

野辺月

「八六三 むさしのや明行月の山のはゝわけこじかたの萩のうは風

田家月」^{55オ}

「八六四 しかそ鳴小田のかりいほのとまをあらみ名はかり月はもりあ

かせ共

驛旅月

「八六五 都おもふ涙に月をやとしをきてあさたつのへのすゑの秋かせ

名所月

（一）行分空白

「八六六 月は今夜うらはあかしとしらすともしるくもあるへき浪の上

哉

(一)行分空白

同夜当座御会

翫月

「八六七 あすよりは秋の半も杉の門はしなあけそ三輪の月かけ

(一)行分空白」^{55ウ}

同十月石清水御歌合当座

初冬

一八六八 秋の露わすれぬ袖も有物をいつしかかはる野への霜哉

時雨

「八六九 まきのやにいとはししくれもるとてもものはそやとる床の月

影

寒野

「八七〇 一とせも今はすゑのゝむら薄霜ふく夜半の風のさむけさ

(一)行分空白)

北野社歌合之由被注尤不審

同十月日当座歌合」^{56オ}

時雨

「八七一 月そとはもるやま道の夕しぐれのこる下葉もあらし吹也

忍恋

「八七二 新古 わかこひはまきの下葉にもる時雨ねるとも袖の色にいてめや

驛旅

「八七三 さひしさをいつよりなれてなかむらんまたみぬ山の秋のゆふ

暮

(一)行分空白

同十一月十三日春日社御歌合

（一）行分空白

「八七四 新拾持 木の葉ちる山のすそのゝ夕くれを詠てけりな袖はぬれつゝ」

落葉

曉月

「八七五 足引の山の木からし吹からにくあるときなき有明の月

松風

勝

「八七六 あはれまむ数には入よ春日山それをそ今は松にふくかせ

(一行分空白)

同二年三月廿六日

新古今竟宴和歌

一八七七 碓続古のかみふる世きをいまにならへこし昔のあとを又たつねついねる

同七月十八日北野御歌合秋雨當日出題

攝政判有序

初秋曉」^{57オ}

一八七八 前大僧正持秋になるあかつきのかねうちつけになるゝか袖の露も涙も

暮山雨

一八七九 足曳の山辺もよそに暁来ぬ秋のめくみのゆふくれの雨

田家風

一八八〇 摂政勝空にこふかとたの雨の日教經て雲吹かへすあきの夕かせ

(一行分空白)

建永元年正月十一日御会高陽院

庭花春久

一八八一 春とめる庭のあるしは八雲たついつもつきせぬ花のかそする

(一行分空白)」^{57ウ}

同七月廿五日御歌合卿相侍臣歌合

朝草花

一八八二 橫雲家蓬勝のたな引山の岡辺なるすゝきもしろく吹あらし哉

海辺月

一八八三 新千持もろこしの山人いまはおしむらんまつらかおきの明かたの月

轄中暮

一八八四 胜勝をくるへき月たに山をまたてぬに夕のあらし袖にしほれぬ

(一行分空白)

同日当座御歌合 建永元年七月イ

曉聞雁」^{58オ}

一八八五 はつかりの山とひこゆるありあけに風吹すさむ荻のうへ哉

田家鹿

一八八六 夜もすからいほもるこのと絶せて外山にかへる鹿そ鳴なる

深山恋

一八八七 跡新続古たえてふかき涙の色までもとはれぬ山の秋そかなしき

(一行分空白)

同月中後日当座御歌合

湖辺月

一八八八 にほの海のもとよりぬるゝたもとにはかはりてやとれ秋のよ

の月

暮山雲」^{58ウ}

一八八九 しら雲のたな引山のゆふかせに身をやすてゝん鹿そ鳴なる

行路風

一八九〇 忍こし道のへ柳秋もなをあはれむかしのかせはらふらん

同月中当座御歌合

寄風懷旧

一八九一 わすれぬる今はみとせの冬のあらし時雨し露の袖にまたひぬ

雨中無常

一八九二 新古なき人のかたみの雲やしほるらん夕の雨に色はみえねと

被忘恋

一八九三 同袖の露もあらぬ色にそ消かへるうつればかはるなけさせしまに」^{59オ}

(一行分空白)

同八月五日鳥羽院新御所初度当座

庭上月当座

一八九四 庭の松にふかき嵐やかへるらん光をみかくやとの月影

(一行分空白)

同八月御歌合式御会

述懷三首

一八九五 なにと又ふかきおもひのかさぬらんくるよをのみなげくへ

き身に

一八九六 なさけありし昔を今になし侘て袖のしつくのしつのをたまき

一八九七 うらと見しそれより袖はしほれにきさても月日は過しけるよ

を」^{59ウ}

(一行分空白)

承建水元々年正月廿二日御会和歌所

春松翠鶴庭筆 神路山有闕字

一八九八 新続 我たのむ 神路の山の松の風いくよの春の色はかはらし

(一行分空白)

同三月七日下鴨社歌合

山家朝儀

一八九九 槇の戸や難面あけし名残とてこれよりつらき朝霞哉

湖辺夕花

一九〇〇 けふくれぬあすは麓の雪とみん長良の山は嵐吹也」^{60オ}

社頭述懷

一九〇一 玉 みつかきやわか代のはしめ契をきしその言の葉を神やうけん
ん

(一行分空白)

承元 同日賀茂之社歌合

海辺帰雁

一九〇一 難波かたすきこし春に又やあふはかなく帰る雁を鳴なる

暮山春雨

一九〇三 御芳野や春雨きほひちらはなをけふもくれぬとさそふ山かせ

社頭夜風

一九〇四 和歌浦やたむくる夜半のかせにみん猶此道に神はなひくや」^{60ウ}

(一行分空白)

同二年三月住吉御歌合

寄月祝

一九〇五 行末はなをもつもりのうら風にくもらぬ月の影の長閑さ

寄旅恋

一九〇六 足曳の山わけどころもかはく程わすれぬ袖の夜はの面影

寄山雜

一九〇七 新古 おく山のおとろか下もふみわけて道ある世そと人に知せん

(一行分空白)

同閏四月四日」^{61オ}

雨中子規

一九〇八 しつかなる夕の雨の草の庵ことゝへ山の鳥のひとゑ

遇不逢恋

一九〇九 あひみても中へつらきさやの山さやはちきりし峯の月影

寄述懷雜

一九一〇 青柳の林の下よたつね入ぬ千年の跡のそのへ古道

(一行分空白)

同四年八月十一日

「九一 雨ふれはいとゝ池水ますかゝみかけさへうつる秋はきのは
な」^{61ウ}

(一行分空白)

同九月粟田宮御歌合

寄海朝

「九二 玉」とまりする一夜のちきりこきわかれをのかさまへ出る舟人

寄山暮

「九三 水無瀬山入逢のかねに年を経て三十あまりの冬そちかづく

「九四 中へにみし世ににたる月もうし同し袖には廻来ぬれと

建暦二年二月廿五日

於紫宸殿花下三首^{62オ}

「九五 吹^{統古}かせもおさまれるよのうれしきは花ちる時そ先おほえける

「九六 同我ならてみしよの春の人そなきわきても匂へ雲の上の花

「九七 九重の花も老木に成にけりなれこし春も昨日と思ふに

(一行分空白)
同三月十七日松尾社歌合無判

初秋風

「九八 有家 みとりなる一葉もまつは落ぬらん朾のもりの秋の初風

山家暮

「九九 山里の夕影草の下露を袖にかけつゝとふ人そなき

社頭難^{62ウ}

「九一〇 夕時雨いかにそむとて尋こじ色かはるなよ松の尾のみや

(一行分空白)